

## ◇第 58 回 IC コー世界大会レポート◇

### 『理想と我欲のギャップを縮めるために』

スイス・コーでのIC世界大会は、7月8日から8月19日までの約1ヶ月半にわたり『理想と我欲のギャップを縮めるために』の総合テーマの下、次に示した5つの会議が開かれました。

芸術会議「現在の在り方を変えて行くために」と「平和作りのイニシアティブ」の会議を中心に日本からは、15名が参加しました。又、研修で訪欧した日本能率協会のグループ10名も、「個人、そしてコミュニティーに奉仕の精神、責任感、リーダーシップを養うために」の会議の一部に参加しました。尚、8月18日には、コー・レクチャー・シリーズの講師として緒方貞子国際協力機構（JICA）理事長（1991-2000 国連難民高等弁務官）が、「人道的アクションから開発援助へ」のテーマで特別講演をされました。

- |           |   |
|-----------|---|
| 7月8日～14日  | 「個人、そしてコミュニティーに奉仕の精神、責任感、リーダーシップを養うために」 |
| 7月16日～21日 | 「コー産業人会議 グローバリゼーションーギャップを縮める」           |
| 7月24日～30日 | 芸術会議「現在の在り方を変えて行くために」                   |
| 8月4日～10日  | 「良き統治を通じた人間の安全保障」                       |
| 8月13日～19日 | 「平和作りのイニシアティブー平和のためのスペースを作る」            |

### 「個人、そしてコミュニティーに奉仕の精神、責任感、リーダーシップを養うために」

ジョアンナ・マーガリット（ポーランド）

今回の会議は、活気と魅力溢れるメキシコ、スイス、東欧、中欧からの若手から成るチームが見事に運営しました。知識も吸収できる、変化に富んだ会議でした。東欧、中欧からの50人を含む300人の参加者が集まりましたが、その中にはインターネットで1週間前にこのコーの会議やICについて知った女性もいました。1週間の会議は3つの部分に分かれていました。初めは私たち自身の変化に目を向けました。どんな変化でも自分たちから始めなければいけないからです。次に個人がコミュニティーや人々の集まりを変えることができる可能性や方法について考えました。最後の

2日間はコミュニティーやグループが社会全体に変化をもたらすことが出来るという点に目を向けました。



■主な内容■

◆第 58 回 IC コー世界大会レポート	1-11	◆「IC と私」	19
◆第 11 回アジア・大平洋青年会議レポート	11-15	◆IC ニュース	20
◆東北アジア青年フォーラム	16-18	◆編集後記	20

## 英蘭協会 スーダンの難民問題

ISSRSJ #4005 日刊英訳

7月10日には、コルネリオ・ソマルガ氏の後継者であるコー財団の新理事長であるベナード・デ・リードマタン氏（元外交官）やジュネーブ、ベルンから大使たちを迎えましたが、最初の講演は、国連人道問題担当事務次長で46歳のノルウェー人であるジャン・イグランド氏によるものでした。彼は数日前にコフィ・アナン国連事務総長に同行し、内戦により荒廃してしまったスーダンのダルフル地方を視察しました。多くの市民が助けを得られない状況にある争いへの認識を高めさせようと、事務次長は訴えました。スーダンでの戦いは1年以上も続き、助けを必要とする難民が100万人を越えています。政府に自国の紛争を認めさせることは容易ではないのですが、全てを失ってしまった市民に心を使うのは私たち一人ひとりの責任だと思えます。

### それぞれのイニシアティブ

私たちの心、家庭、コミュニティ、社会を変えることは不可能ではないことを私たちはここコーで連日耳にし、経験しています。クリッシュ・ラヴァル氏は“常にビジョンを持って”というビル・エーガー氏の言葉を、私達に思い出させてくれました。ルボフ・ズイスコーさんはクリミア半島のシンフェロポリで、脳性麻痺の子どもたちのためのリハビリセンター、障害を持った人や糖尿病を抱えた人のインターネットクラブ、そしてかつてナチスの収容所に収容された人達が集い、話し、癒しを得られるようなセンターを始めたということをお話してくれました。イングランド出身のリチャード・ホーソン氏は草の根レベルで、社会的にのけ者扱いにされている個人に権限を与え、移民が快く暮らせるようにするために取り組んでいるノッテングム・パートナーシップ・カウンシルを創ったことを話してくれました。ノッテングム出身のイマム（イスラム教の導師）もまた“信仰をより強める”という共同の努力で宗教間の橋渡しをした経験を話してくれました。ワシントンのランディ・ラフィンさんは“心に耳を傾け家庭をひらく”という近隣の人を家に招待し、お互いを知り合うために夕食会を開くというイニシアティブについて話しました。ルイス・ピゲ氏はリオでタクシードライバーが日常の業務の中で正直になれるようアメリカ・マルチレリによって考え出されたリオタクシー共同体の話をしました。

### 歴史の“傷”を癒す

ロブ・コーコラン氏とデービット・キャンプト氏は月曜日に『都市の希望』（註1、以下全ての註は最終の20ページを参照下さい）の話をしました。歴史の“傷”を癒し、

和解することをバージニア州リッチモンドでの白人とアフリカ系アメリカ人のコミュニティで始め、成功したプログラムです。このリッチモンド市は一世紀以上もの間、奴隷を南部の農場に送りこんだのでした。ロブとデービットの両氏が、コミュニティを築くための技術を伝えるワークショップをリードしました。私も金曜のお茶の後から夕食までの時間、そのワークショップに参加しました。そのワークショップがモルジブの人たちとアメリカの人たちの素晴らしいチームワークのもとに行われたということをお伝えしたいと思います。

日本能率協会の代表団が2日間訪問され、「素晴らしい時間を過ごすことができ、また来年も訪れたい」と言われました。またこの会議に様々な年代の人々が交わり合っていることを高く評価していました。和解をもたらすための理論と技術を学ぶコー・スカラース・コース（註2）も始まりました。そのプログラムはナイジェリア、レバノン、パレスチナ、スーダン、アフガニスタン、ガーナを含む約12ヶ国の生徒20人から成る4週間のコースです。

オーストラリアのジョン・ミルズ氏は1998年に始まった『癒しの旅』というオーストラリアでの先住民と非先住民との和解を目指した、ユニークな活動について話をしました。『癒しの旅』は大きな反響を呼び、政府の政策にも影響を及ぼしたばかりでなく、“カナダ・ファースト・ネーションズ”（先住民のインディアンが自分達をそう呼び始めた）はそのインスピレーションのもとに『癒しと和解の日』を昨年スタートしました。

### 真のコミュニティを体言するコー

会議の大事な要素としてコミュニティ・ミーティングがあります。私は1日おきに全体の朝食を用意する担当の約15名の主に青年のグループのメンバーでしたが、皆仲間意識が強く励ましあっていました。会議の中で私にとって一番素晴らしかったのは、コミュニティ・グループの中で静かな時間を持ち、様々な反省をし、語り合うことでした。

14歳の男の子がコミュニティ・ミーティングに来て皆と一緒に静かな時間を持ち、会議や普段の生活について聞かれた時、『無関心と間違った動機が社会の問題の主な原因だと思います』と答えたので、とても感心させられました。閉会式ではコーの昔からの友人であり、ロシアの作家、ジャーナリスト、またロシア正教の司教でもあるブラッドミア・ゼンリンスキー氏が真のコミュニティと偽物のコミュニティの話をしてくれました。コーでは、自由に、お互い奉仕し対話しあう意思によって団結した真のコミュニティや本当のコミュニケーションで成り立ったコミュニティを経験できます。（コーからのニュース No.1より抄訳）

## 「コー産業人会議 グローバリゼーション—ギャップを縮める」

先週の土曜日、若く才能あるバイオリニスト、マリナ・チチェさんによる素晴らしいコンサートがありました。その間、ここに集まり、考え、気持ちや愛を分かち合う全ての人のことが私の頭から離れませんでした。素晴らしいバイオリンの音楽に包まれて、人々の顔は調和と相互理解に美しく満たされているように見えました。この快活な雰囲気は一週間にわたる第32回コー産業会議の間中続きましたが、現在のグローバリゼーションの状況と世界での貧富等の格差を是正するためのアイデアを引き出したり、熟考する上でも役立ちました。この会議はインターナショナル・コミュニケーション・フォーラム（註3）、ファーマーズ・ダイアログ（註4）、ジュニア・ラウンド・テーブル（註5）との共催で行われましたが、全体会議においてだけでなく、各自のグループに分かれたミーティングにおいてもそれぞれが大事な役割を果たしました。

しかし全て順調にことが運んだ訳ではありません。天気が良い日が続いていたかと思えば、スイス経済省のジョン・ダニエル・ガーバ長官の公開講演の最中に、突然雷が荒れ狂う空模様になりました。あたかも外の世界には解決すべき問題、実現すべき事業、叶えたい夢が満ち溢れているということ、空が私達に知らせているようでした。

### 嵐と静けさ

嵐と静けさが同時にやってきた瞬間、魅力的なコーの風景は“新しい時代の始まりでもあるが、新たな考えや精神的变化への追求の始まりでもある”というレッチ・ワレサ氏の日曜日の言葉を私達に思い出させてくれました。元ポーランド大統領の参加はマウンテンハウスのゲストに対してだけでなく、3日前ワレサ氏に1時間のインタビューを行ったフレンチ・スイス・ラジオに対しても重要な意味を持ちました。夫人、娘さん、そして息子さんと一緒にマウンテン・ハウスの庭を歩いている彼の姿は、コーの持つ家族的な雰囲気に更に自然さと温かさを添えました。

インターナショナル・コミュニケーション・フォーラム会長のベルナード・マーグェリット氏との会話で、今日、理想主義とは役立たないものどころか、私達の行動

### ホセ・カルロス・レオン・バアルガス（メキシコ）

を導くべき必須の要素であるということ学びました。「もっと世界に平等さをもたらすためにグローバリゼーションは是正されうる、と強く信じている人々にとって、今こそ立ち上がり、“この世界に変化をもたらす動機を与えるのは、私達の行動指針、考え、倫理観である”と唱える改革運動を続ける時なのです」とマーグェリット氏は述べていました。

コーの精神は単に会議や講演にだけ見出される訳ではありません。グレイスドルフ氏の幼い娘さんが昨日、“愛が意味するもの”を素晴らしい形で実演してくれました。アナウンスのためにステージに上がった彼に抱きついていての姿は、愛というものがいかなるものかを如実に示してくれました。このかわいらしいイメージは、この世界にもっと賢明に向き合うべきという目標を示してくれました。この日は彼の娘さんの5才の誕生日でしたが、同時にビル・ポーター氏の誕生日でもありました。ビル・ポーター氏はインターナショナル・コミュニケーション・フォーラムの創始者ですが、15年前に疑いの念を抱きながら初めてコーにやって来たこと、又、このマウンテンハウスで自分が唯一メディアに係わる人間だと気がついたという話をしてくれました。その時、彼はメディアの世界に新しい倫理観を注入すべきというひらめきを得たのです。コーで彼のその努力の成果を眼前にすること程、彼の誕生日のプレゼントにふさわしいものがあつたでしょうか？

初めてやってきたマレーシア人の女性は、コーで5ヶ月の赤ちゃんから89歳の方まで様々な年齢層の方に会い、驚かされていました。その日の終わりには全ての年齢層の人が一つに溶け合っていたのです。



● 参加者と語り合うワレサ元ポーランド大統領

月曜日はセドリック・ペシアさんの演奏を満喫しました。彼女はコンクールで受賞したこともあるピアニストで、次の日の農業に関する会議の前奏曲として、素晴らしい演奏を披露してくれました。メロディーと音楽のキーから、グローバル化には埋めるべきいくつかのギャップがあるという私達の日々接する問題へとキーを入れ換えました。ジンバブエでのいくつかの農業プロジェクトの成功談を紹介しながら、イアン・ロバートソン氏はそれらの成功とチームワークとの関連性を強調しましたが、それは他のスピーチや会議、そして日々の仕事の中にも同様に存在することでした。例えば昨日、メキシコ人である私は、文化を異にするフランス系ポランド人、ブルンジ人の女性と共にコー・ウェブサイト内のプレス・リリースを準備するため、一緒に働きました。

(CBIリンク:www.cauxinitiativesforbusiness.orgも是非ご覧になっていただきたいと思います)

コー・インターン(註6)、ボランティア、そしてハウスで奉仕して下さった皆さんへの感謝の気持ちも表したいと思います。コーの精神は全ての食事にも表れてい

ます。というのは人々の素晴らしい、又、親切なサービスの表れで、それなくしてはここでの滞在の間、会議にも十分に参加できなかったことでしょう。

人々の注目を集めるようなICの活動の結果こそがまさに広報に結びつきます。最近の例として、イギリス国会議員のトニー・コルマン氏はICの郵便物を受け取った後、コーに来る事を決めました。彼が政党のマネージャーと内閣府からも公式な許可証を得て来たということは、彼らがコーの価値を認め、評価したことに他なりません。彼は何冊ものICの本を買って帰りました。

8年前、高校生だった私は、将来を夢みていました。現在でもまだ夢を見ていますが、夢というのは見るだけでは叶わないことに気がつきました。全ての構造物を強くするためには二つの柱が必要です。私が日々接する人々というのが一つの柱であり、私の信念、価値観がもう一方の柱です。今日、ICはこの二つの要素に橋をかけ、私の人生におけるこのギャップを埋める機会を与えてくれました。

(コーからのニュース No.2 抄訳)

## 芸術会議「現在の在り方を変えて行くために」

ケネス・ノーベル (イギリス)

芸術家250人が芸術家以外の50人と共にコーに集う時、何が期待できるのでしょうか? 討論、創造性、表現、興奮、演技? その全てがありました。いやそれ以上のものがありました。何故ならコーでの芸術は変化についてでもあり、芸術の改革を目指すグループによるこの会議の間“現在のあり方を変えていくために”というテーマが繰り返し表現されたからです。

ヒュー&デル・ウィリアム夫妻が彼らの信仰の旅と、このICの考え方を通じて芸術が人々や社会に良い変化を与えようという確信について述べたセッションから会議は始まりました。「芸術家は特別で一般の人とは異なる。素晴らしい才能と素質に恵まれ、豊かな想像力と並外れた専門技術を持っている。しかし彼らも私たちと同じ人間なのです。私たちが“現在のあり方を変えていくために”について話しをするのならば、芸術家の変化から話し始めるのが良いと思います。愛は想像力を生む上で重要なもので、芸術が変化をもたらす力となるための秘訣であり、愛と芸術はどちらも私たちに生命を吹き込

んでくれるのです。しかし芸術家は卑しい文化を導いてしまう危険な側面も持っています」と述べました。

「変化をもたらすとはどういうことか? それは必ずしも良いことなのであろうか? それは続くのだろうか?」といった会議の主なテーマについての話が芸術家たちにより毎朝行われました。



● コーのダイニングルーム、食事は大切な交流の場

## 先住民ダンサー

カナダ、アルバータ州南部平原の“レッド・サンダー”先住民ダンサーのグループの色彩、リズム、そして活力。あらゆる人種の人々が参加したフレンド・シップ・ダンスの間、劇場を1周しただけでとても疲れてしまった私にひきかえ、トリティー・セブンの部族のパフォーマンスのダイナミックさは際立っていました。7人の一団はクローチャイルド一族のメンバーでフランク・ブックマン博士 (MRA、現IC創始者) の友人ウォーキング・バッファロー酋長の子孫です。母なる大地を守ることの大切さ、全てが平等である生活のサークル、代々受け継がれてきた狩猟と癒しの話など彼らの伝統文化からのメッセージをダンスを通して私たちへ伝えてくれました。

## ムーリエル・スミスの一生

ムーリエル・スミスの一生を描いたシャリマー・ヒックマン・ジョーンズさんが演じた“ムーリエル”の力強い演技に感動しました。スミスは有名なアフリカ系アメリカ人歌手で、MRAに出会った後、アメリカにおける人種間の融合の仕事をするためにブロードウェイでの輝かしいキャリアを投げ打ったのです。

## 折り紙のワークショップ

和田マリアンネさんたちによる折り紙のワークショップは大勢の子供たちの想像力、創造性をかきたてました。そして彼らの両親たちが、その間に会議に参加できるようにしてくれました。

## 感動を与えたコンサート

ベトナム出身のフォン・ニューエン氏 (アコーディオン) と奥さんの日本出身のミホ・サノさん (ピアノ) による二重奏コンサートの活力、妙技。フォン氏が4歳の時にボートピープルとして信仰を見出した話は、多くの人々に感動を与えました。

## 創造性が変化を起こす

リバプール出身で彫刻家のステファン・ブロードベント氏は「芸術家は“独特な文化”に陥ってしまっています。個としての芸術家という考え方は500年前に始まったに過ぎません。芸術家は自分の工房に閉じこも

り、自分自身の中でのみ意味を求めていたので、多くのコミュニティは個性を失ってしまいました。結果としてどの町も違いがなくなっていました。芸術家への賞賛というよりはむしろ私達の中に存する創造性について話すべきです。創造性こそが変化を起こします」と彼は話し、イギリス社会において最も恵まれない人々を含む多くのコミュニティの願いを表そうとした彼の作品のスライドを見せてくれました。

## エネルギーを再び満たす

最終日にはディスカッショングループで集まり、この会議について評価し、各自にとってどのような意義があったのかを話し合いました。“感情に色を塗る”というミシェル・アンジェロ・ペトロン氏のワークショップにセルビア人女性が参加しましたが、言葉で表すことが難しい感情表現を絵は可能にしてくれるそうです。「私の最初の絵はとても暗く、ピアノの鍵盤を描いたつもりの絵が、大砲のように見るとある人からは言われました。しかし最後の絵は明るい色で満ちていました」又、「何年もコーに来ていますが、この1週間は今までの中で一素晴らしい時間でした」と言う女性や、「安心できる環境で多くの新しい友人、考えに出会い、多くのことを見直し、エネルギーを再び満たすことができました」と言う女性もいました。

(コーからのニュースNo.3より抄訳)



●子供たちに折り紙を教える日本からの参加者

コー芸術会議「現在の在り方を変えて行くために」に参加して

## コーの役割の大切さ

工藤 美樹子 (高校教師)

私は様々な縁により、今年の夏7月24日から30日まで、コー芸術会議に参加してまいりました。

コーには是非行ってみたいと思っていました。以前から私は支配する・支配される、自分と違う民族や人に偏見をもつ、ということに対して大いなる違和感を感じていましたが、世界融和のための原点に私も是非参加してみたいと思っていました。

今回私の参加した芸術会議は、今の世界の状況を変革するのに芸術はどのような役割を演じることができるか、ということコンセプトで開催されました。毎日芸術家によるパネルディスカッションがあり、その間を埋めるように芸術家(プロ・半プロ)によるアート(ピアノ・管弦・歌などや演劇・映画)が演じられ、それはもう盛りだくさんにプログラムが組まれていました。また、ワークショップがいくつか生まれ、私たち日本人は折り紙・ちぎり絵のワークショップを開きましたが、その他に写真・フラワーアレンジメント・アフリカの太鼓などのワークショップが開かれていました。この会議を通じて私が特に強く印象に残ったものは、カナダに住むファースト・ネイションズ(先住民のインディアン)の人たちによる民族の踊り、インドの少数民族シュロンの少年たちの歌声、ベトナムのポートピープルだったアコーディオン奏者でした。それぞれ弱い立場を経験しな

がらも、力強く誇り高く自らの芸術を披露する姿に元気付けられると共に、地球の多様性と同一性を感じました。

また、もうひとつの収穫は、日本人ではない人たちと多くの交流を持ったことです。これは世界を考える上でとても大切なことだと思います。世界には様々な人々がいる。似ているところもあれば、違っているところもある。それを充分認識した上で語り合っていく。そんな場としてコーの役割は大切なものだと思います。社会科(特に歴史)を若者に教える仕事を持っている私としても、コーでの経験をこれからの仕事に活かし頑張りたいと思います。



●コーの中庭で子供たちと(後列左端が工藤さん)

## 自分なりの方法でよりよい世界のために

溝際 依利子 (立命館大学4年生)

コーでの一週間はあっという間でしたが、毎日コンサート、演劇、ダンス、映画などの芸術がシャワーのように次から次へと降りかかる、とても贅沢な時間を過ごしました。芸術作品に触れるだけでなく、生身の芸術の作り手に会って話を聞き、作品の背景を知る中で、色々な立場からの世界の見方を学びました。芸術会議でのワークショップを通し、私が学んだのは芸術の新たな一面、芸術の楽しみ方です。また、多くのすばらしい人々と出会い、本当に多くの刺激を受けました。

特に印象的だったのが、紛争や事件後の不安を和らげ、平和への願いを共有するために作られたモニュメントや演劇、芸術イベントです。この「芸術を通した世界へのアプローチ」はとても新鮮な考え方でした。

自分の問題意識に対し、地域の伝統文化や自分の表現方法を生かして、様々なかたちでアクションを起こしている人々を目にし、これまで私が芸術に対して抱いていた美しいもの、楽しむものという範囲から芸術の意味合

いがぐっと広がりました。

毎朝数時間参加したワークショップでは、興味を持っていたけれどずっと始めることができなかつた写真についてのクラスを選択しました。そこでは、どうやって写真をうまく撮るかということよりも、見て、感じて、表



●ベトナムと日本の音楽家のご夫妻と共に(後列左端が溝際さん)

現することの楽しさを学びました。芸術が何か別世界の特別のようなものに思っていた私には、とても意味のある実感でした。

それ以降、その後の旅行中も写真を撮り、身の回りの小さな出来事に注意を払うことで、世界がより美しく興味深く不思議に満ち溢れていることに気づくようになりました。芸術家に限らず、コーに集まった多くの人々に会って話をして気付いたのは、誰もが平和な世界、地域の改善など世界をもっとより良くしたいという思いを持ち、実現するための自分なりの方法を探し見つけていることです。

規模が国境を越えるほどのすばらしい活動をしている人もいれば、学生の立場で、学んだことを生かし自分の将来に結び付け、実現に向けて努力し始めた人にも会いました。自分なりの方法でよりよい世界のために行動することは、同時に自分のやりたいことを明確にし、やりがいを感じながら人生を楽しむ秘訣でもあるように感じました。就職を来年に控え、将来進む道を考えているところだった私にとってはこのような人々と出会えたことはとても幸運なことでした。今後はここで感じたこと、学んだことを消化しながら、自分を見つめ、照らし合わせて将来を考えるきっかけにしたいと思います。

## 「良き統治を通じた人間の安全保証」

リリー・ムダヘムカ（ブルンジ出身、現在カナダ在住）

この会議に、多様な民族が参加していることに、とりわけ内戦の危機でダルフル地方のニュースが大きな話題になっている中で、イギリス、カナダ、そしてスーダンからのスーダン人が多数参加していることに驚きました。エジプトからの25人の代表団に加え、カナダ・ファースト・ネーションズ（カナダ先住民族のインディアン）を初め、チリ、ボリビア、ナガランド（インド東北部）、オーストラリア、ロシアの先住民の人たちも出席していました。

セント・エジディオ・コミュニティーの創設者アンドレア・リッカルディー氏は講演の中で、「平和の実現を信じる者こそが、平和の力、すなわち信頼、対人関係、対話に基づいた謙虚な力を得るのです」と言いました。リッカルディー氏にとって平和をもたらすということは簡単ではなくとも、不可能な事とは思えなかったのです。そのことを証明するために、モザンビークで120万人の死者を出した反政府ゲリラと政府軍との紛争に平和をもたらすプロセスへのサント・エジディオ・コミュニティーの取り組みの話をしました。平和へのプロセスは2年半にもわたりました。リッカルディー氏は「コーは世界で最も美しいテラスのひとつです。私たちは例え憎しみに満ちた世界というテラスに直面したとしても、平和の希求をあきらめてはなりません」と語りました。

南アフリカ人のジーン・フリーエさんとレトラパムハレレ氏による話に強い印象を受けました。ジーンさんは1993年ケープタウンのレストランでの襲撃で23歳の娘リンディーさんを亡くした白人女性で、黒人であるレトラパ氏は正にその襲撃を命じた人だったのです。今、内戦の渦中にある国に生まれ育った私に

とっては、彼らが肩を並べて立っているのを見るのが、正に奇跡であり、希望と映ったのです。彼らの話を聞きながら、お互いを苦しめ合ってきた私たちブルンジ人が、許し合い、握手をし、「昨日までの敵が今日は兄弟になり得る」ということを世界に伝えられる日がいつか来るのであろうか、と考えていました。『南アフリカの子—自由戦士としての私の人生』というレトラパ氏が出した本についての話をジーンさんがカーラジオで聞いたことから彼らの物語りは始まりました。ジーンさんはその本の出版記念会に行き、レトラパ氏の命じた襲撃による犠牲者の母親であることを告げました。「私に会う事をいとわなかった彼女の姿に大変感動しました。私のことを許して欲しいと願う前に、既に私を許してくれたのです。それは、人が与えうる最高の贈り物の一つではないでしょうか？」とレトラパ氏は言いました。18年間の亡命生活を終えたレトラパ氏の村への帰還を祝う式典に、ジーンさんが招待されました。その式典には約1500人の黒人が参加しましたが、ジーンさんは、わずか8人の白人の参加者のうちの一人でした。彼女はそこ



●和解の体験を共に語るフリーエさんとムハレレ氏

でのスピーチで、350年にもわたる抑圧、奴隷制度、アパルトヘイト（人種隔離政策）を先祖に代わって謝罪したのです。

「全ての答えを知っていると信じる程、何と私たちは無知であったのでしょうか。私たちは謝罪しなければならないのです。和解は一夜にして起こるわけではなく、すべきことが私たちにはたくさんあります」と彼女は言いました。会議場に居た全ての人は彼女の言葉に深い感銘を受けました。私は、彼らの中に希望の光を見出しました。

2001年9月11日の世界貿易センタービル的事件以降、世界全体がイスラムについて問い始めています。エジプトのパハ・バックリー教授が「イスラム教はアラブ人のみならず世界の人々のための宗教であり、穏健な生き方を勧めているものです。平和、愛、尊ぶこと、そして献身を教える宗教で、現在広まっている否定的なイメージとは全く反対の宗教なのです」と話しました。

人間の安全保障とは、健康や経済的な保障、政治的な発展、外交、そして貧困問題の改善等と切り離しては考えられないということを、この会議に出席した多くの人たちが強調しました。ユニセフのエリック・ラローチェ博士は紛争の渦中にある子供達の状況、とりわけ少年兵について言及しながら、人間の安全保障の大切さを語りました。子供たちはよく戦争の犠牲になりますが、自ら戦いに参加しなければならないことも多いのです。家族の生活を保障するために、子供を兵士にさせておくことを選ぶ両親の話もしてくれました。「紛争解決のプロセスにおける最も重要な要素は教育です。人間の安全保障をもたらす上で教育は根本的役割を果たすのです」と彼は言いました。

この会議を更に豊かなものにしてくれたのが演劇です。エジプトからの代表団が『新たな希望』という劇を上演してくれました。又、世界の先住民同士のダイアログもこの会議の中で開かれましたが、その参加者である、ロシアの先住民の踊りも披露されました。



●語り合うイスラエルとノルウェーとナイジェリアからの参加者

タイムリーで魅力的な、多彩なテーマからなるワークショップも毎日開かれました。私は「亡命者と移住の問題における彼らの役割」というテーマのワークショップに参加しました。亡命者に対する世論とメディアの役割を私たちは知りたかったのです。私たちのグループにはソーシャル・ワーカー、難民と仕事をしている弁護士、そしてジャーナリストもおり、難民に対する偏見をどのようになくすることができるか等について、各自の経験に基づいて考えを述べ合いました。

現在ロンドンに住むアフガニスタン人の詩人シャビビ・シャーさんは、「自分のような難民が社会でいかに弱く劣っていると感じさせられていたか」という彼女の体験を話してくれました。難民として新たな環境で生きていくためには、自分の元々の職業に就くこともあきらめざるを得ないことがしばしばです。他の2つのワークショップは、「警察と若者とコミュニティ」、そして、『都市の希望』のグループのリードの下、信頼を導くための対話の在り方を探った、「正直な会話」というテーマで行われました。

## 世界の未来を映す鏡

現在亡命中のスーダン人は、「コーには力がみなぎっており、謝罪の大切さをここで学びました」と述べ、コー・スカラズ・コースへのレバノンからの参加者は「コーは世界がどのような姿になるべきかを映しだしている鏡です」と言いました。アラブの民兵をサポートしているとしてエジプトはスーダンから非難を受けているのですが、最終日の会議でスーダン人の女性と、エジプト人の女性はお互いを許し、抱き合いました。

通訳の人たちが、それぞれ人参、卵、コーヒー豆を沸騰したお湯に入れた話を最後にしました。数分後、人参は柔らかくなり、卵は固くなり、コーヒー豆はお湯の色を変え、芳香を放ちました。ある母親が娘に「もし災難に直面したら、あなたならどうする?」と尋ねたのです。私たちにも同じ質問が投げかけられました。ふにゃふにゃとなって失望してしまうでしょうか? 身を固くして逃げようとするでしょうか?あるいは問題を解決し、世界に新たな意味をもたらすでしょうか?あなたはこの3つのうちのどれに当てはまるでしょうか?

この1週間は私にとって素晴らしいものでした。私のアイデンティティ、ブルンジ人であることを改めて強く感じました。私の国と国民に平和と安全をもたらすためには、喜んで何でもしたいという気持ちを持って私は家に帰ります。

(コーからのニュース No.4 より抄訳)



## 「平和作りのイニシアティブ—平和のためのスペースを作る—」

長野 清志（国際 IC 日本協会事務局）

最後のこの会議には、20ヶ国以上のアフリカ諸国からの参加者を含む計60ヶ国より400人余りが参加しました。現在60ヶ国近くの国で紛争・内戦が起きていると言われますが、その約3分の1の19ヶ国がアフリカの国々とのことです。前述の各会議のレポートの中でも述べられていましたが、コーが紛争を抱える国や地域から来ている人々に大いなる希望を与える場所であるというのを改めて強く感じました。

### イスラエル/パレスチナの人々の 融和への取り組み

この会議では、かつて無い程、平和を築こうと活動している多くのイスラエル人を迎えました。大きなダイニングルームで祝祭を祝うユダヤ人たちの周りのテーブルには多くの国から来たイスラムの人々が食事をしているという光景もコーならではのもののように思えました。

8月15日には、イスラエル/パレスチナ間の和解の促進、信頼醸成、平和の構築のために2年前に市民のイニシアティブにより始まったジュネバ・イニシアティブというグループの中心となっている2人のイスラエル人と2人のパレスチナ人によるパネル・ディスカッションが開かれ、ジャーナリストも多数取材にやってきました。イスラエルからのパネリストは、元イスラエル議会議員（労働党）で現在ビジネスマン、パレスチナからのパネリストには、現在もPLO執行委員会のメンバーを務めている人も含まれていました。

2年の間に4人のパネリスト間に培われたパートナーシップが彼らのユーモアを含んだ言葉のやり取りにも感じられました。パレスチナからのパネリストは、このグ



●お互いの信頼関係を感じさせたパレスチナとイスラエルのパネリスト

ループがフランスに呼ばれた時の体験を話しました。フランスでのある会合には、5,000人の聴衆が集まったそうです。「どんな人たちなのか」と尋ねると、主催者が、「フランス系のユダヤ人とフランスに住むパレスチナ人です。今まではお互いにデモを掛け合っていたのが、今回お互いに話し合う気運になっているのです」それを聞いただけでも、この活動を始めた価値があったと思ったそうです。アフリカからの参加者は、「中東の状況は自分の国のイスラム教徒とクリスチアンの間の紛争に大きな影響を与えるので、その意味でも中東での平和を実現して欲しい」と訴えていました。何れにせよこの新たな運動の展開は世界各国からの参加者に大きな希望を与えてくれました。

### アフリカからの融和のストーリー

又、別の日の会議では、ナイジェリア（註7）のイスラムのイマムとクリスチアンの牧師が共に演壇に並んで話をしました。イスラムのイマムはクリスチアンの民兵に精神的な師と二人の兄弟を殺されました。又、牧師は、暴力事件の中で片腕を失ったのです。「自分たちは、お互いに憎みあうよう教育されて来ました。しかし、モスクで他のイマムが許しについて話している時にクリスチアンに対する憎しみを反省することができたのです」とイマムは語り、牧師も「イマムを信頼できるようになるまで3年かかりました。私の母親が亡くなった時にイマムが訪ねてくれたのがきっかけでした」と続けました。今では共に、異宗教仲介センターの共同責任者として国の平和作りのために共同して活動していると報告しました。

その他にも、ケニアからの参加者の、清廉な若いリーダーを育てるためにICが行っているクリーン・アフリカ・キャンペーンの報告、そして、紛争を抱えているアフリカの多くの国の代表から、コーで平和をもたらすことが可能であるという希望を見出したという話がありました。

### 緒方貞子氏の講演

8月18日には、緒方貞子国際協力機構（JICA）理事長（1991-2000国連難民高等弁務官）が、「人道的アクションから開発援助へ」のテーマで特別講演を行いました

た。聴衆の中の、特にアフリカの人々が緒方さんの長年にわたる難民の人たちのための貢献を感謝していました。緒方さんが発たれる時、コーのマウンテンハウスの入り口で、丁度カソリック教会のミサを終えて下において来たアフリカの人たちに取り囲まれました。歌をリードしていたブルンディからの牧師はコンゴとの国境沿いの難民キャンプでの虐殺事件で家族を失ったばかりの人でしたが、歌で緒方さんに感謝の意を表しました。

## 文化の夕べ

文化の夕べでは各国からの歌や踊りや楽器の演奏等があり、楽しい一時を過ごしました。日本の歌の合唱にはアンゴラの元難民の大学院生と、フィンランドの女性加わってくれました。又、インドの東北部のナガランドのニケター・イラル氏がテレホンソングというICの歌を歌ってくれましたが、この歌は心の中に響く良心(神)の声を聞こうという意味のコミカルなメッセージソングですが、日本の中島秀夫さん(元IC専従、後、カネボウ役員)によって作詞されたものです。会議の後、飛行機の乗り継ぎの時間の長いことを同情された、パレスチナ人は、「空港で待っている間、心の電話をじっくり聞きますから大丈夫」と答えたそうです。ここでも、日本の人の作詞した曲がインド人によって歌われ、パレスチナ人のリーダーに影響を与えるという不思議さと素

晴らしさを感じました。

## 中国との関係

去る8月のサッカーのアジアカップでの中国人の日本のプレイヤーやサポーターに対する厳しい反応について何人かのヨーロッパの友人たちから心配されました。

コーの後、韓国で、日中韓の大学生が参加するICの青年会議が行われること、又、10月には中国国際交流協会の招きでICのグループで中国に行くなど日本のICとしても日中間の関係の改善に取り組んでいる旨を説明すると皆さんとても喜んでくれました。問題を抱えた多くの世界の国々から集うコーの人々に、私たちもアジアからの希望を発信して行きたいものと改めて考えさせられました。



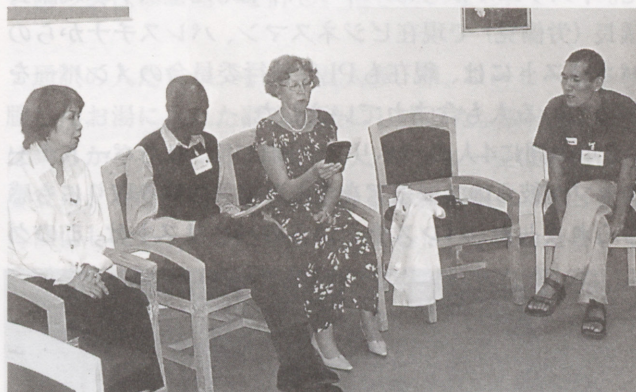
●アフリカの人々に歌で感謝を示された緒方貞子氏

## 世界での問題に目を向けさせてくれたコー

瀬角 龍博 (元海外青年協力隊員)

コーの会議については僕がオーストラリアのIC(MRA)センターにいた頃にいろいろと話を聞いていたのでいつかは行ってみたいと思っていた。今回、幸運にも日本に帰る時期と会議の日程が重なっていたので8日間会議に参加することができた。会議ではいろいろな意味で刺激を受け、少しばかり視野を広げられたように感じる。

コーの会議に参加する3日前、僕はガーナにいた。2年間のボランティア活動を終えたところだった。2年間のほとんどを小さな町で過ごし、ガーナを出ることがなかった僕が、ヨーロッパに来てまず感じた事は、ヨーロッパの物質的な豊かさだった。ビルが立ち並び、道路は舗装され、現代的な車、バス、路面電車が街中を走る。人々はおしゃれに着飾り、ショッピングをし、レストランで食事をする。以前は当たり前と感じていたこと、全く気にならなかった事に違和感を覚えた。抵抗を感じた。「物が溢れている。なんて贅沢なのだ」しかし会議に参加して、それぞれの国や人々が抱える問題、例えばイスラエルとパレスチナの関係、スーダ



●文化の夕べに向けて日本の歌を練習 (右端が瀬角さん)

ンの難民問題、ヨーロッパ人の隣国に対する思い等について考えているうちに、物質的なことばかりに目を向けていた自分に気づいた。世の中には解決すべき人道的な問題も数多く存在することを思い出した。そういった意味でコーでの8日間は人々が心の中に抱えている問題に改めて目を向けるいい機会になった。

また、僕は、前述のとおりガーナにいたせいもあり、アフリカから来た人に興味があって、よく話をした。彼

らが抱えている問題やそれに対する考えはどのようなものなのかを直接彼らから聞きたかった。

その中でもジョージ・バロレ氏(ライベリア)との話が心に残った。彼とはコーを発つ日の朝食の時間に初めて会った。出発の準備で忙しい中、お互いの空き時間を見つけて話をしたので、彼と話をしたのはほんの短い時間だったが、非常に有意義な時間だった。彼は日本についてある程度の知識を持っていて、戦後の日本がどのように発展したのかということに非常に興味を持っていた。僕は「発展した要素としては朝鮮戦争があったことなどいろいろあるけれど、やはり基礎になる要素として教育、特に道德教育がよかった。そして人々は自らを犠牲にしてよく働いた」と答えた。すると彼は「そうなんだ。日本人には道德、そして規律があるんだ」と言って、規律の重要性について話をし始めた。そして彼はライベリアが抱えている問題について少し話をしてくれた。

「ライベリアは昔、アフリカの中では比較的進んだ国だった。しかし今は国の状態は悪く、多くの問題を抱えている。深刻な問題のひとつは、個々の主張が強すぎて話がまとまらないということだ。ある問題を解決しようとすると、いろんな意見が出されるが、人々は他人の意見を認めず、もし自分の主張が通らなければ、問題の解決に向けて協力しようとしな。また、協力を求めた場合、お金を払わなければ手伝わてくれない。もちろんお金を払う余裕などない」

つまり、問題を解決する以前の段階に極めて難しい問

題があるということである。ガーナにいた間に、全く同じとは思わないが、同じような光景を目の当たりにしているので、想像するのは難しくはなかった。彼はこの問題を解決する方法のひとつとして教育、特に小学生ぐらいの子供に対する道德、規律の教育が大切だと考えている。長期的な展望で解決しようとしているのである。また、やりたいことが彼の頭の中にはあるのだが、実行するのは経済的なことなど、いろいろと障害があると言っていた。出発の時間が近づき、最後に僕は「あなたが一所懸命がんばったところですぐには成果は見えてこないだろう。もしかしたら十年、二十年たっても何も変わらないかもしれない。でも諦めてはいけない。誰かがやらなければライベリアは良くならない。やり続けることが大事だ」と言った。厳しい、また無責任な意見だと思った。しかし彼は「その通りだ。簡単ではない。でもやらなければならない」と快く同意してくれた。

彼の考え、自国に対する思い、情熱はとても素晴らしかった。実際にライベリアに行ってみないと、話を聞いただけでは現状は把握できない。だから今の僕にはライベリアに対して何ができるのかはわからない。でも少なくとも彼とは連絡を取り続けていきたいと思う。将来行ってみたいアフリカの国がひとつ増えた。

会議の間にいろいろな人の話を聞き、世界には様々な人がいて、いろんな問題があることを再確認し、ガーナでの二年間を終えた今、日本に帰ってから何をしていくのかを考えるためのいい時間をすごせたように思う。

## 第11回アジア・太平洋青年会議 (APYC) レポート

### 「立ち上がるカンボジアの青年たち」

兼松 恵

2004年、7月21-31日 第11回アジア太平洋青年会議が日本を初め世界各国のIC/MRAの皆様のご支援のもと、『あなたとわたしが築くより良い世界—行動を起こすのは今! 私がやらなければ誰が? 今でなければ何時?』というテーマで、世界28カ国からの青年らを迎えて開かれました。

1970年代に約170万人もの人々が虐殺されたという悲劇の歴史を背負い、90年代によりやく戦後復興の歩みを始めたカンボジアでは、現在も、栄養失調、人身売買、失業問題、麻薬、マフィア、幼児売春、家庭内暴力、教育の質の低さ、汚職、賄賂など多くの社会問題が存在し、その重圧に押しつぶされそうな現実があります。そのような中で、この会議は、カンボジアの青年たちが、世界各国からの青年たちと共に、新しい建設的な一歩を見出し、勇気を持って歩み始める機会となりました。



●アンコールアンコールワット前に勢揃いした会議の参加者たち

カンボジアからの参加者は85名、ベトナム、台湾、インドネシア、韓国からはそれぞれ20から25名との多くの参加者がありました。ベトナムとカンボジアの両国の間には長い歴史的な相克がありましたが、近年においても、特に'60年代のベトナム戦争から今日にいたるまで両国間の様々な軋轢が人々の心に深い感情的

こりをもたらしました。

両国の青年たちはそれぞれ戦争を生き抜いてきた両親から相手国の人々に対する強い不信感と憎しみの感情を伝えられて育った世代です。今回それぞれお互いの言葉に耳を傾け合い、胸につかえていたことも正直に話し合える機会を得ました。お互いに相手の考えを聞き理解を深め合い、友情を培い、和解と信頼感を築く掛け橋になって行こうと決意を分かち合いました。

今回の会議には、世界各国から40名の「アクション・フォー・ライフ (AFL)」(註8)のメンバーたちが、その最後の研修として、カンボジアの青年らと共に、準備と運営に携わりました。彼らのなかにはロシアを初め、モルドバや他の旧東欧諸国からの参加者もあり、彼らにとっては旧共産主義、社会主義の社会から、自由社会を築こうとしているカンボジアの人々の生活の困難さを自分たちの社会同様に理解することができ、カンボジアの青年達とも積極的に意見交換がなされていました。

逆に自由な社会で育った台湾からの青年たちを初めとした国々からの参加者は、カンボジアの青年たちが直面している社会が同世代の自分たちに与えられた環境とは大きく異なり、その中で、彼らがどのように生計をたて、教育を受ける機会を得るために苦勞しているかを知りました。又、そのような状況にあっても前向きに真剣に生きる彼らの姿勢に触れて、驚き、感動し、学んだことも多かったようです。

インド、カシミール地方出身の法律家であるアルタフ氏は、カシミール紛争の中、同志であった友人も亡くし、自らもインド政府によって投獄されました。釈放された後もインド人に対する深い憎しみの心が開放されていないことに気付きました。この会議の中で出会った、信頼できるインド人の暖かい配慮と友情に触れ、先ず自分の心を自由にするために、憎しみの気持ちを捨てよう決心しました。

中国系のマレーシア人であるナンドール氏は、同じマレーシア人でも「人種の違うマレー人、インド人は信頼するな」と親にいわれて育ってききましたが、両親が離婚したとき、自分の親である中国人でさえ自分を裏切るのではないかと深く傷つき家を飛び出してしまいました。そのようなつらい時期にIC/MRAの人々に出会い、自分を見つめなおし、相手に求めるのではなく、自分から家族の和解のためにできることをしなければと決意して家に戻りました。

又、家族間の融和にとどまらず、異なる人種同士の間にも信頼と融和を築く生き方をして行こうと新しい歩みを始めました。

そんな彼と知り合ったインドネシアのジャワ文化の中で育った青年と中国系のインドネシアの青年たちもそれ

ぞれの不信感を捨て、友情を育み、彼ら3人で自分たちの世代から偏見を断ち切り、多人種多異文化の混在するインドネシア社会で暮らす人々の間に信頼の掛け橋を築くために、共に支えあって行こうと決意しました。

又、インドネシアの女性は、『静かに自分の良心の声に耳を傾ける』ことを学び、「人にはそれぞれ抱えている問題を解決に導く糸口が備えられているにも拘わらず、心配事や嫉妬心や憎しみなど、いろいろな否定的な考えに捕らわれて、どこから始めて良いか見えなくなっていることがあります。私も静まって自分を見つめ直し自分の感情を把握し直したことから、直面していた問題の解決の糸口を見出すことができました」と語りました。

「こころの絆を取り戻すために、もう何年も会っていない父親に、これまでの胸の内を語る手紙を書こうと決心した」と話したカンボジアの青年たちもいました。

全体で230人という多数の参加者でしたが、小さなグループに分かれ、それぞれのこれまでの人生の道りを紹介し、お互いに耳を傾け静かに語り合う機会が与えられました。各自が抱えて来た悲しみ、戸惑い、喜び、怒り、悩み等を分かち合うことができ、信頼の絆が深まりました。参加者一人ひとりが新しく歩み出すための新たな決意をすることによって、それぞれの家庭で、社会で、そしてお互いの国々の間で必要とされる、和解と信頼の種が、すばらしい希望の種が、各国の青年たちの心に蒔かれました。

次回、2年後のアジア太平洋青年会議を是非インドネシアで開きたいとインドネシアの参加者からの強い要望が出ています。

アジア太平洋諸国の青年たちが世界各国の青年たちと共に、世界の人々に勇気と希望を与えるこのアジア太平洋青年会議をカンボジアで開催し、多くのカンボジアの青年たちが参加することを可能にして下さった多くの日本の皆様に、この会議の準備に当たった者の一人として心より感謝申し上げます。



●会議の様子

## カンボジアの人々の笑顔

青山学院大学4年生 益戸 平 (ICユース)

カンボジアの人々の笑顔、それが10日間にわたるアジア・大太平洋青年会議 (Asia Pacific Youth Conference) で一番の思い出となりました。何を幼稚なことを、とお考えになるかもしれませんが、彼らの笑顔とその裏に隠されていたものを、私は決して忘れることができないのです。

8月22日、80人余りのカンボジアの参加者が、世界各国からの航海を終えた総勢140名近くのICのメンバーを待っていました。彼らは、私たちをととても親切に、そして眩しい程の笑顔で迎えてくれました。英語の問題もあつてか、あまり口数が多いという感じは受けませんでした。話し掛けると一生懸命にコミュニケーションを図ってくれる、そんな素朴な所に人間的な魅力を感じました。私がそんな彼らと交流を深めることは、そう時間のかかることではありませんでした。

そして、会議3日目、親しくなった友人から一人のカンボジアの学生を紹介されました。私が日本人であることを告げると、彼女は私に言いたいことがあると切り出しました。そして、その子は目に薄っすらと涙を溜め、屈託の無い笑顔で私に「日本人にはずっと感謝を言いたいと思っていた。私たちカンボジア人の暮らしを助けてくれてありがとう」と言い、日本の開発援助に対する感謝の気持ちを熱心に語りました。私は彼女の曇りのない目を見ながら、不適切な日本のODAの事例と、感謝をされるに値しない私自身を顧みて、彼女の言葉をもったいなく、そして申し訳なく思いました。今振り返ると、カンボジアの人々は他の国の人に対しても、もちろん親切に振舞っていましたが、どこか私にだけとりわけ好感を持っているようでした。彼らは私が日本人ということで、非常に好意的に接してくれていたのです。この時から、私は一層カンボジアの人々の事を意識するようになり、彼らへの理解を深めていきました。

私はまず、会議中の生活の中で、カンボジアという国のいくつかの問題に気がきました。例えば、バスやバイクで移動する際には、全く舗装されていない道路や、豪華なホテルに挟まれるような掘建て小屋を毎日目にしました。滞在先では、水道を捻れば赤土がでてきました。土産物屋がある場所を訪れると、必ず小銭を目当てに、地雷で被害にあった不自由な人や、小さな子供たちが後をつけてきました。私の足に男の子が二人しがみついて

くることもありました。それを離れた所から親と思われる人が、テントから寝転がって見ていました。このように、非常に大変な国であることを肌で感じました。インフラや社会福祉は影もなく、所得格差だけが痛いほど目に付く場所でした。

そして、会議中の個人的に互いの人生等を話し合う時間には、ほとんど全てのカンボジア人から家庭内の問題を耳にしました。離婚や暴力に貧困等、いつも仲良くふざけ合っていた彼らが、涙ながらに身に起こった辛い出来事を話してくれました。その中で、私に「ありがとう」、と言ってくれた彼女の家庭の事情も知ることになりました。彼女の家では、父親が外では何人もの愛人を作り、家では病気がちな母とその子に暴力を振るい、母とその子が小さな弟や妹を養っているそうです。私は、彼女の笑顔からは想像出来ない内容に愕然とし、言葉一つかけられずに黙り込んでしまいました。私の軽い言葉では、何の慰めにもならないと思う程の深い悲しみを感じました。どうして問題の多い国に住み、家庭でも苦勞をしている彼女が、私のように金持ちの国から来て何の苦勞も知らない学生に、「ありがとう」と言ってくれたのだろうか、と思いました。逆の立場だったら、私は彼女のように、一片の偽りも厭らしさもない笑顔で言えただろうか、と。

カンボジア人の眩しい笑顔の裏には、多くの悲しい出来事とそれを感じさせない強さがありました。日常的に辛いことを目にしなくてはいけない現実の中で、それを受け入れ変えていこうとする力を備えていました。私は滞在中、彼らについて、親友であるインドネシアの友人



●伝統舞踊を披露してくれたカンボジアの参加者たち

とよく話していましたが、私はその彼にもカンボジアの人と共通したものを感じていました。彼も現実的に物事と向きあって、それを肯定的に捉える強さを持っている人物でした。その彼は現在、学生の身でありながら、インドネシアにおける矛盾と混乱を本気で是正していこうと、活動を展開しています。彼らのみではなく、会議の多くの参加者がそれぞれの地域でイニシアティブス・オブ・チェンジ (Initiatives of change) を実践していました。

そのような彼らに、日本のICは何をしているのか、と頻りに聞かれました。私は、自身が関わってきた韓国やインドネシアのユースの活動を中心に話していました。しかし、これまでにしてきたことが、ICが提唱する「自らが社会に向けて行動を起こす」ということに当たるのかというと、そうではないような気がしました。カンボジア人、オーストラリア人、インドネシア人、多くの人々がこれからの日本に注目し期待していました。彼らの期待に応え、感謝される国であり続けるためにも、日本のICユースはより一層理念を打ち出した行動をと

ていかなくはならないことでしょう。私にはユースとしての時間はあまりありませんが、カンボジアで出会い、本当に多くの事を教えてくれた人々のためにも、何らかの形で私を感じたことを後の人たちに引き継いでいきたい、と考えています。そして、これから社会に出てもカンボジアの人々の笑顔を忘れずに、強い心をもってICの精神を実践していくことを決め、胸に刻みました。



●お互いの人生を語り合った「ファミリーグループ」(右から2人目が益戸さん)

## 地球市民としてのアイデンティティーを見出した APYC

鹿取 美江 (立命館大学大学院生)

### ネパールでデモに遭遇

今日も、APYCの友人からメールが届きました。親愛なるお姉さん (Dear my sister) と親しみのこもった題の付けられたそのメールの中身は、日本語で丁寧に書かれていました。彼女日く、日本語の良い勉強になるのだとか。今では、すっかり私の日課になっているAPYCの友人からのメールのチェック。私は、メールを読むたびにただ楽しかっただけではないAPYCでのあの日々を嘯み締めています。

### 舞い上がっていた私

私は、カンボジアから日本に帰ってきて数日間、完全に舞い上がっていたと思います。APYCでの楽しかった思い出をただ羅列して、込み上げる満足感を抑えられないばかりに、そうした思い出を家族や友人に話すのに大忙しになっていました。しかし、10日以上が経ち、酔いも冷めてきた頃から、“APYCは、私が家族や友人に話しているように、ただ楽しかっただけのものだろうか。私は、APYCで何かを学んだだろうか”と考えるようになりました。しばらくの間、私は考えていたと思います。しかし、その答えが釈然としないまま私はネパールに行く日を迎え、意外にもその地で、その答えを大変鮮明な形で知らされることとなりました。

私はNGO会議に参加するため、カンボジアから日本に帰ってきて、一ヶ月も経たないうちに、ネパールに行きました。そして不運にも、ネパール滞在中、イラクにおいて人質となっていたネパール人12名が殺されたことをきっかけとして始まった学生デモにぶつかってしまい、ホテルから一步も出られないという事態に遭遇しました。外から聞こえてくる、デモ行進をする若者たちの叫び声、それを鎮圧しようと警察が発砲する音。とても怖かったです。こんな事態に、ホテル内の人々がとる行動はさまざまでした。ネパール人は、不満がありながらも何もできない無力感のため息ばかりついていました。ただただ本を読み、音楽を聴き、事が収まるのをじっと待っていました。日本人は、めったにない事態を面白がっているように見えました。そして、彼らにとっては、この事態は、他人事のようにさえ思えました。ある日本人が「なぜぼくら旅行者がネパールの問題に巻き込まなければならないんだ。退屈で仕方がない。私は旅行者だと札を張って、どうどうと町を歩こうか」と言いました。私は、それを聞いてとても悲しい気持ちになりました。私も正直、日本人として、銃声を聞いても、今、自分がいるすぐ側でそれは起こっていて、自分の命に危

険があるかもしれないといった切迫した感覚をもつことができず、自分とは遠い世界で起こっているような感覚を持ってしまっていたことは確かでした。しかし、そうした状況のなかで、自分の感情に対してもどかしさを感じていたのも確かであり、この事態を他人事とは到底思えないし、思いたくもなかったのです。私は、こうした事態になってしまったことをただただ悲しく思っていました。私は、ネパールの学生たちがモスリムの人々をなりふりかまわず憎み、暴力を振るっていたことでも、警察官が、ネパール人を見れば片っ端から棒で叩いていたことでもなく、こうした事態になってしまった何がしか私たちもかかわっているすべてのことが悲しかったのです。

## APYCで気付かされたこと

こうして私は、ある日本人の発言をきっかけとして、今の状況についての彼と対比した自分の意見が次々に思い浮かんだわけですが、APYCでの出来事が私の心情にいかに大きな影響を与えているかを知らされることになりました。

私は、こんなことを考えていたのです。“今おきている事態を他人事のように思えず、そして思いたくない自分がある。こうした考えになるのは、私が、日本人であると同時に、地球市民として、そうした事態を受け止めているからではないか。考えてみると、私の中の地球市民としてのアイデンティティは、APYCで、私が鮮明に自覚したことの1つだった気がする”と。改めて今考えても、確かに、APYCでは、みな同じものを食べ、おいしいということを共有しあったり、「ファミリーグループ」でのディスカッションや「静かな時間」の後で、互いに作り出した、とてもおだやかな雰囲気の中で、不思議なくらい素直に、お互いの経験を共有しあったり、夜遅くまで、ルームメイトと世界をテーマにまじめに議論したりする中で、私は、地球市民としてのアイデンティティを、自分の中に見出すようになっていた気がします。

さらに、私は、こんなことも考えていました。“気づいてみると、私は、こんな緊迫した状況の中であって、持っていくような不安感を、偏った解釈で紛らわそうとはしていないようだ。私は、誰が悪い、誰がかわいそうだ、といった感情論には走ってはいない。私は、ネパールの学生たちがモスリムの人々をなりふりかまわず憎み、暴力を振るっていたこと、警察官が、ネパール人を見れば片っ端から棒でたたいていたことについて、あなたたちがやっていることは悪いと責める気にはなら

ず、ただ、こうした事態になってしまった何がしか私たちもかかわっているすべてのことが悲しいと思っています。こう考えるのは、APYCで私は、学生デモに参加したことのあるインドネシアの友人や、台湾の女性警官の友人と、立場を超えて腹をわって語り合ったことから、今、彼らの顔が思い浮かぶからかもしれない。彼らの顔が思い浮かぶと、デモをやっているネパールの学生たち、おっかない警察官の見方が変わってくるように思える。たとえば、警察官や学生たちが、立场上やっている暴力的なことよりも、むしろ、彼らが、仲間同士、バナナを片手に立ち話をしているところやじゃれあっているところが目に付く。立場を超えればみな普通の生活のある心優しい普通の人々なのだ”と。

そして、こんなことを考えていた私は、ネパールで、“誰が悪い、誰がかわいそうではなくて、立場を越えて、心を通わせて、私も含めてみなでこの問題を解決しなければ”と強く思っていました。私は、緊迫した状況の中で、緊迫しているからこそ、APYCがいかに自分の心情に大きな影響を与えていたかを知りました。そして、APYCは、ただ楽しかっただけではない、私にとって大変学びの多いものであったと心から思いました。

## お互いに自分の周りから

ネパールから日本に帰ってきて、私は、腰をすえてAPYCの友人からのメールに目を通しました。いろんな国の人たちからメールは届いていて、鼻息あらく、ネパールから帰ってきた私には、そうしたメールすべてが、私のこれからの行動を応援しているように見え、また、メールをくれた友人たちが、私の最高の仲間に見えました。あなたはあなたの周りから、わたしはわたしの周りから、少しずつ努力していこう。私は、APYCの友人からのメールの返事を書くとき、しばしば、最後に、“お互いがんばろうね”と書くようにしています。



●日本の歌を紹介した鹿取さん（左）と益戸さん

## 東北アジア青年フォーラム

### 『東北アジアの平和と繁栄のための青年の役割』

去る8月19日から24日まで韓国のMRA/ICの主催で日中韓の青年が集り、東北アジアの平和と繁栄のための3国の青年達の役割と協力の方法について語り合う東北アジア青年フォーラムがソウル市及び天安市（国立中央青少年修練院）にて開催されました。

中国からは、中国薬科大学、北京交通大学、北京師範大学、北京外国語大学、河北科技大学、南京大學、南京師範大学、内モンゴル大学芸術学院、對外經濟貿易大学からの学生の代表、計10名が参加した他、中国国際交流協会の羅毅理事、及び中華全国青年連合会の趙重樵国際部副部長が参加しました。韓国からは、檀国大学、延世大学、江陵大学、淑明女子大学、梨花女子大学、成均館大学、中央大学、世宗大学、湖西大学、ソウル大学、東国大学の学生13名が参加しました。日本からは、青山学院大学、慶應義塾大学、筑波大学、早稲田大学から大学院生を含む14名が参加した他、国際IC日本協会から榊たか子副会長、及び事務局、そして通訳として、金光明氏（プラボジャパン代表取締役）が参加しました。3国の青年の間での率直な意見交換が行われたのを初め、種々のプログラムを通して相互理解の促進と友好が図られました。会議の参加者の感想をご紹介します。

#### ◇東北アジアフォーラムに参加して◇

### 今後の生き方への決意

山下 恭弘（筑波大学比較文化学類3年）

私は今回の活動に参加させて頂き、東北アジアの平和の必要性を改めて感じたと共に、同地域の学生たちが平和を強く望んでいる事が分かった。また、東北アジアの文化に似た部分があれば、異なる部分もある事が分かった。更に、独立記念館を訪れる機会にも恵まれ、戦争の悲惨さとその精神的異常さ、更にそれが人に与える影響が60年を越えてもまだ残り続けるものである事にも改めて気づかされた。

今回の活動に参加する前、私は韓国・中国に大きな不安と誤解を抱いていた。特に、韓国に対しては不安と脅威、敵対意識を日々募らせていた。サッカーで日本隊が韓国とは関係の無いトルコと戦った際、日本が惜しくも負けてしまった時である。韓国の大勢の支持者が街頭に集まって大画面の中継を見ながら韓国が他の国代表と試合をしているのを応援している場面を日本の新聞が報道した。その際、中継で日本隊が負けた知らせが伝えられた。そこで、何たる事か、韓国の支持者が大きな声を上げて喜んだ。それを見ると私は悲しいと思うよりも憤りを感じた。その際、日本と韓国はまだ友情を感じるにはほど遠い存在だと思った。また、私がマレーシアに行った際も首都クアラルンプールでツインタワーを見た際に2つの全く同じな建築物が日本と韓国の企業で争って建てられた経緯を知らされた。両国は国外でも敵対意識を

持っている様だった。また、マレーシアの空港では韓国製の機械が多くあった。近年、かつて我々が小学生の時に日本が世界1位であると教わった鉄鋼・造船等の産業が韓国に追い抜かれた。韓国では日本に追い付け、追い越せで産業を発達させている事を聞いていたが、本当に追い越されてしまった様な気がして、今後の事を考えると韓国が日本の脅威に思えた。そうした産業の発展に対する脅威は中国に対しても同様である。しかし、今回の活動後に思ったのは、東北アジアは競争して争い、いがみ合うのではなく、共に補完仕合い、協力し合う事こそ正しいと言うことだ。考えを変えたのは、韓国・中国の学生と触れ合う機会を得た事もあるが、韓国の一般家



●日本の参加者たちが歌を披露



庭に泊まらせてもらい、厚い歓迎を受けた事もまた大きい。民宿先のご主人さんは「韓国に来たら我々をまた訪ねて下さい」とおっしゃり、人情の温かさを感じさせて頂いた。また、今回知り合う事になった学生達の一人一人の優しさや面白さは、もう二度とこの同じ人員で合う事が無いと思うと、私は涙が出て来るほどに悲しいと思った。

私たち学生はこの度、社会に出る直前にこのような貴重なお金では買えない機会を頂いた。こうした機会を得たものは一人一人の心の奥に残り続け、これからの生活の中で世論を作る時に大きな要素として作用する。もは

や、私たちの中では韓国・中国を敵対視し、憎みあう事はないだろう。ましてや戦争をしよう等と言う考えは思い起こらず、平和的な問題の解決と、協力の仕方を考えるであろう。折に触れて、友達と話をする際にも、こうした開けた考え方を広め、今回での経験を共有する事が出来るであろう。今回の活動を通じた収穫は大きく、こうした活動をさせて頂いた私としては、これを世に広める義務感を感じる。最後に、今回の活動に携わられた方々に、貴重な経験をさせて頂いた事に感謝すると同時に、今回学んだ事を忘れず、広めていく事を約束してこの報告を結ぼうと思う。

## 本音での交流と自国文化への誇り

清水 佑記子（早稲田大学政治経済学部政治学科2年）

2004年度の東北アジア青年フォーラムを終えて、特に心に残った経験をここで振り返ってみたいと思います。一つ目はディスカッションでの心の開き方について、二つ目は文化交流についてです。

今回、本フォーラムに参加するに当たって、事前に日本人のメンバーで韓国の歴史について勉強し、訪中経験の豊富な榊先生や中国人の留学生の方にお話をうかがう機会を設けていただきました。私は大学で政治学(Political Science)を専攻していることもあって、これまで国家対国家の関係としてそれらの国々を捉え、国際関係上の問題を考えたり友人と議論したりする機会は多々ありましたが、実際に韓国や中国に足を運んだことがなかったため、このたび韓国人や中国人と個人単位で交流するという事で、どのような態度で彼らと向き合ったらよいのか、とても迷いました。なぜならば、普通の学生同士の当たり障りのない話、例えばお互いの国の流行や勉強していることについての話ならば普通に和気藹々とできると思ったのですが、今回のテーマである「東北アジアの平和と安定のための青年の役割」について根本から真剣に話し合うようになったら、否が応でもこれまで各人が、各国で受けてきた歴史教育に基づく感情や容易にすれ違いうる歴史観を持っていることが前提となるため、それぞれの国家あるいは一部の国民の言動についての捉え方に相違があって、そこから葛藤が生じることが予想されたからです。

実際、出会ってからレセプションでお互い自己紹介をしたり、個人対個人レヴェルでの話をしたりするところまでは特に迷うこともなくスムーズに交流が進行しました。ところが、グループに分かれての討論を翌日に控えた夜に不安に思っていたのはやはり上記の点でした。すなわち、韓国人や中国人の人たちとお互い

仲良くなれたのは良いけれど、もし翌日のフォーラムのテーマについての話し合いの際に我が国の一国民として本音で意見を述べたら、せつかくできた友人関係に亀裂が生じてしまうのではないかということです。もしかすると、とりあえず穏やかに友好関係を築くことだけを考えるならば、相手を刺激しないことだけを選んで話せばよいのかもしれないと一度は考えました。

しかし、実際に話し合いが始まってみると私の所属していたグループではいきなり靖国神社についての話題が出され、韓中両国の学生とも歯に衣着せぬ論調で啖呵をきってきたので、逆にこちらははっきりと本音の意見を述べるべきであると確信し、自分の言葉で伝えたかった日本人の心や歴史観について述べ、また相手国の率直な意見を生で聞くことができ、結果的に仲たがいすることなくお互いに理解しがたい価値観があるということが確認できたことは大きな成果でした。

次に文化交流について記したいと思います。今回、私は浴衣を着て華道を披露しましたが、これまで日本でお花を活けてきた中で、活けたものを展示したことは何度もありましたが、これほど大勢の人の前で、解説をしながらお花を活ける過程を披露するのは初めてでした。



●華道を紹介中の清水さん（中央）

そのため、事前に華道そのものの発祥を振り返ってみたり、何を表現しているのかをわかりやすく伝えるにはどうしたらよいかを考えてみたりしました。これは華道だけではなく、文化交流でのすべての発表を通して、改めて日本の伝統文化独特の趣に愛着を感じ、いっそうそれを誇りに思えるようになりました。きっと他の二国の人たちも、それぞれ自国の文化を他国の人に紹介することで、そのそれぞれの良さを再確認できたのではないかと思います。



●中国からの学生たち

今回は開催場所が韓国であったということで、この他にも各文化施設の訪問やホームステイ、そしてソウル市内の観光など、過去だけではなく現在の韓国を体感することができて、韓国を理解する上でとても充実した6日間を過ごすことができました。その一つ一つの経験の中で感じたことを、東北アジア地域の未来につながるように自分のできる範囲から徐々に伝えていきたいと思えます。



●会議の様子

## 【スケジュール】

### 8月19日(木)(第1日)

- 13:20 羽田空港発 金浦空港着 15:40
- 18:00 開会式、歓迎夕食会(国際青少年センター)
- 19:00 講演  
テーマ:「東北アジアの平和と繁栄のための青年の役割」  
講師:李潤求(リ・ユング)博士(大韓赤十字社総裁)
- 21:00 参加者オリエンテーション

### 8月20日(金)(第2日)

- 10:00 龍仁民俗村見学
- 13:00 国立中央青少年修練院(天安)到着
- 15:00 フォーラム1  
日韓中の各指導者による基調講演  
「21世紀における韓・中・日の青年の協力のために—心の交流と信頼を築くアジアの燈台を」  
榊 たか子 国際IC日本協会副会長  
「東北アジアの平和実現のための青年の役割」  
羅 毅 中国国際交流協会理事  
「韓・中・日の青年交流の現状と課題」  
車 光善 MRA/IC 韓国本部事務総長  
ディスカッション
- 19:30 韓国の文化の理解を深めるため伝統音楽(サムルノリ)を体験学習
- 22:00 韓・中・日青年共同声明書草案作成準備(草案作成委員会メンバーの選出)

### 8月21日(土)(第3日)

- 09:00 フォーラム2  
サブテーマの発表とディスカッション  
(韓国、中国、日本各国青年代表1~2名)
- 13:00 フォーラム3  
サブテーマの発表とディスカッション
- 15:00 水泳、運動競技
- 19:00 各国の参加者による文化交流
- 21:00 自由討論、共同声明書草案の検討

### 8月22日(日)(第4日)

- 09:00 独立記念館見学
- 11:00 独立記念館出発、ソウルへ
- 13:30 景福宮見学
- 15:30 ホームステイ先の家族の紹介後、各ホームステイ先に  
(1~2名ずつ分かれてホームステイ先に分宿)

### 8月23日(月)(第5日)

- 09:00 自由行動(ホームステイ先の家族、或いは、韓国の大学生参加者と共に)
- 19:30 閉会式、送別夕食会

### 8月24日(火)(第6日)

- 08:15 国際青少年センターより出発、帰国

テーマ: 東北アジアの平和と繁栄のための青年の役割  
サブテーマ: 1. 21世紀における韓・中・日の青年の協力の方法(日本)  
2. 東北アジアの平和実現のための青年の役割(中国)  
3. 韓・中・日の青年交流の展望と課題(韓国)

イスラムの方々への理解を深めるため、今号よりIC(MRA)と出会ったイスラムの方々の体験や考え方をご紹介することにしました。第1回はレバノンの方のストーリーです。

## ◇ICと私◇

### 真のイスラム教の再生を

ヒシャム・シハブ (レバノン、ジャーナリスト)

1960年、レバノンに生まれた私は、世界は宗派によって分かれているのだと、幼い頃から気付いていました。1960年代前半、ベイルートの「コンクリートの森」の中に残されたわずかな緑地で遊んでいるとき、ピエールやエアラスなど私とは異なる名前をもつ男の子達はキリスト教徒なのだ気付いたのです。ことの善悪に拘わらず、彼らは口論が起きると必ずお互いを味方し合っていました。ビー球遊びを巡る口論でさえ喧嘩になっていました。

イスラム教の過激派が私を仲間にしたのは13歳のときでした。兄と私は、モスクで20代前半の男に付いて、コーランを勉強するティンエージャーのグループに魅力を感じていました。

すぐに私は軍隊の訓練所に連れていかれました。その時は00、モハメッドやサラディンの足跡に従っているような感覚でした。コーランからの一節が、よくジハードが義務であるという証明に引用されていました。そこで説教者たちは中世以来の宗教的布告を自分たち流に解釈し、ジハードを放棄することはとても罪深いことだと論じたのです。「真っ直ぐに銃を撃ちたければキリスト教徒を視界にイメージしなさい」と言われました。

その二年後、内乱が起き、私は近所のキリスト教徒を砲撃し、キリスト教徒の民兵を待ち伏せして奇襲しました。

### 兄の死

その後、私は大学へ行きました。私の兄がキリスト教左翼の民兵に殺されるまでは、私の戦争への関与は最小限のものでした。その後、私は昼は授業に出席し、夜はその一味の仲間を追いしました。1975年に内乱が起きた際、私は戦争に参加し、近所のキリスト教徒を砲撃し、キリスト教徒の民兵を待ち伏せしました。その後、私は感度の良いテレスコープのついた長距離射程のライフルを与えられ、ベイルートのキリスト教徒を狙い打つように言われました。私はレンズを通して三人の人間、老婆と男の子2人が走っていく姿を捉えましたが、その時、真実が何かを悟ったのです。一人は従兄弟に似ていましたし、老婆は祖母を思い出さ

せました。私の良心が「彼らは私達と同じ人間だ」と語ったのです。私は命令を拒否し、民兵を辞めました。どんな理由があろうと血を流さしてはいけないと悟りました。

### 汝の敵を愛せよ

私は大学の講義でコーランと聖書を読みました。そこで私は、キリストと彼のメッセージを信じない、そしてキリスト教徒を尊重しないイスラム教徒は、規律正しいイスラム教徒ではないということに気づきました。そして、「汝の敵を愛せよ」という一節を呼んだとき、わたしの国のイスラム教徒に攻撃している人たちは良いキリスト教徒ではないということも分かりました。そして私たちも良いイスラム教徒ではなかったのです。私はイスラム教の信仰ではなく、観念を教えられたに過ぎないと理解しました。私は「恐怖の家」から「愛の家」へ引越そうと決心しました。

戦争が終わると、キリスト教徒とイスラム教徒の対話を進めるためのNGOを友人と設立しました。三年前にスイスのコーへ行き、私の同胞である、アサッド・シャフタリ氏がイスラムの人たちに対して犯した残虐行為を涙ながらに謝罪するのを目にしました。彼一人を非難の対象とする訳にはいきませんでした。私はステージに駆け上り、彼と責任を分かち合いました。今、私たちはレバノンで憎しみの文化を取り除くために共に活動しています。

私たちイスラム教徒はジハードや男尊女卑や人権無視など、時代錯誤的なものを捨てていかななくてはなりません。ほとんどのイスラム教徒が抱える悲惨な経済状況を改善する必要があります。しかし、それだけでテロがなくなる訳ではありません。イスラム社会の民主主義や人権の不足がリーダーシップの空白をもたらし、過激派に付け込まれる余地を与えることになるのです。私たちは、自分の間違いを直視しなければなりません。謙虚なイスラム教徒がイスラム教をそのハイジャッカーや過激派から取り戻し、再生させるべきです。私たちが共通の価値をもつことができるようになれば、戦争やテロを防ぐのに役立つに違いありません。

(CAUX BOOKS 『Why TERROR—is there alternative ?』から翻訳)

◆◆◆ IC ニュース ◆◆◆

■ 第27回 IC 関西秋季大会の開催

恒例の第27回秋季大会が去る10月2日(土)から3日(日)にかけ、長崎や東京からの参加者を含めた17名が参加して大阪ロッジ舞洲で開催されました。参加者からは、カンボジアでのアジア・太平洋青年会議やスイス・コーのIC世界大会に参加して学んだり感じたことが役立っているという例として、「コーやカンボジアの話を家族にしているうちに、母や祖母もボランティア活動をするようになった。自転車が倒れても助けてあげる人が少ない。自分が助けたらとても喜ばれた。身の回りでは何か気付いたら必ず他の人を助けられるようになった」、「人と会って話をする時、自分と比べるのではなく、その人にとっての幸せは、ベストは何かと考えることが心地よくなった。父ともお互いを許せるようになるなど、小さいところから変化が生まれている。自分なりの方法でよりよい社会のために貢献したい」などの話が紹介されました。

■ 福岡での IC (イニシアティブス・オブ・チェンジ) 活動の紹介

去る11月14日(日)に福岡で開催された日本交流分析協会九州支部の秋季研究発表大会の一部として、本年のコーIC世界大会に参加された牧みえ子さんと服部晴美さんから報告が行われると共に、東京のIC事務局の長野からもICの考え方や世界での現在の活動状況等が報告されました。

註1：『都市の希望』

人種間(特にアフリカ系アメリカ人との間で)の過去の傷を癒し融和をもたらすためにICの人々がアメリカのリッチモンドで1993年に始めた。現在、イギリス等にも同様の活動が広がっている。

註2：コー・スカラース・コース

世界各国の20名程の主に大学生を対象に、紛争の解決・平和構築の理念と技術を学ぶプログラム。1991年以来、コーで毎夏1ヶ月に亘って開催されている。

註3：インターナショナル・コミュニケーション・フォーラム

1991年コー産業人会議に参加したメディア関係者が、メディアの真の責任を考え、メディアに携わる人々の倫理的価値観を高めることを目的としてICF(インターナショナル・コミュニケーション・フォーラム)を結成。その後、世界各地でセミナーを開催し、既に約120ヶ国、2千人以上のメディア関係者との関係が結ばれている。

註4：ファーマーズ・ダイアローグ

IC/MRAを知る農業関係者が、ヨーロッパにおける共通の農業政策を発展させたいという思いから1994年にスイス・コーで始め、翌年は再びコーで開催。世界にそのネットワークを広げていく必要性を感じ、96年にはアメリカで、98年にはポーランド、2001年にはインド、2003年にはカンボジアで開催。2004年11月にはタイで開催予定。

註5：ジュニア・ラウンド・テーブル

コーで毎夏開催されている産業人会議「コー・イニシアティブス・オブ・ビジネス」に参加した、若手のビジネスマン、弁護士等が新しい世代におけるネットワークを作ろうと始める。

註6：コー・インターン

各国から青年を募集し、毎夏のコーの世界大会中に会議の運営を色々な分野で支えてもらいながら、同時にICを理解してもらうことを目指して発足させた制度。2004年は27ヶ国から76人の青年が参加。

註7：ナイジェリアでは、特に2000年以降クリスチャンとイスラム教徒の衝突が北部を中心に続発。北部を中心にイスラム教徒が人口の47%、南東部中心にクリスチャンは35%

註8：アクション・フォー・ライフ (AfL)

各国の青年たちが寝食を共にし、インド、アジア各国を回りながら、その国々の人々と知り合い、文化等も学ぶと共に自分自身の成長を図ることを目指す9ヶ月にわたるプログラム。2001年の9月から第1回が、2003年の9月から第2回が開催された。

編集後記

- ・紙面の都合で、中国国際交流協会の招聘による10月10日からの日本のICグループによる中国訪問のご報告は次号でさせていただきます。又、第2回日韓大学生フォーラム(11月にソウルで開催)等のご報告を致します。
- ・会員の皆様がお元気で良いお年を迎えられますよう心よりお祈り致します。明年も宜しくお願い申し上げます。